

(表1)

データ作成年	メタアナリシス	ランダム化比較試験	準ランダム化比較試験	比較研究	診療ガイドライン
1999年	5	208	18	0	6
2000年	5	245	26	0	18
2001年	12	366	59	0	27
2002年	18	360	63	0	67
2003年	30	518	100	8,629	74
2004年	37	544	110	8,210	62
2005年	19	477	140	8,404	128
2006年	46	721	201	10,973	111
2007年	3	38	5	514	2
総計	175件	3,477件	722件	36,730件	502件

(9) 論文種類の追加

2007年より、「論文種類」（医学中央雑誌基本データベースに採択している文献のタイプ別分類、「記事区分」と呼称する場合もある）の見直しを行い、今までより、きめ細かい分類を行っている。まず、従来「解説」「一般」などに分類されていた文献のうち、「Q & A」「レター」「症例検討会」に該当するものは、それぞれ新設される論文種類「Q&A」「レター」「症例検討会」に分類。更に、1991年より採択が中止されていた「座談会」に該当する文献を、再度採択することとし、同じく新設される論文種類「座談会」に分類しており、医中誌Webでの、絞り込み検索が可能になっている。

① 座談会

医療関係のトピックについて、「座談会」「対談」「鼎談」などと明記され、2人以上の対談形式で掲載されている記事を「座談会」として収録する。なお、この座談会記事は、1990年作成データまでは「会議録」として採択されていたが、1991年作成データより採択を中止していた。

② Q & A

これまで「解説」として分類されてきた、質問と答えで構成された記事を「Q & A」とする。

④ レター

手紙形式の記事を「レター」とする。「編集者への手紙」、「Letter to the editor」「著者か

らの返事」、「Author's Reply」等がこれにあたり、これらの記事は、これまで「一般」として分類されていた。

⑤ 症例検討会

実際の経験症例を取り上げて、診断、治療、予後、患者教育、看護の方法などについて討論する形式で掲載された記事を「症例検討会」とする。討論のやりとりが省かれ、討論結果と考察のみの記事も含む。「症例検討会」、「クリニカルカンファレンス」、「ケースカンファレンス」、「事例検討会」、「臨床病理検討会」、「CPC」等。なお、これらの記事は、これまで「会議録」または「解説」として分類されていた。

以上のような、作業を経て、医中誌基本データベースとして、医中誌Webから、医学文献情報が提供されており、検索および索引に用いる、シソーラスの改定ばかりでなく、編集内容は利用者からの意見を積極的に取り入れ、常に改善する方向で進んでいる。

3. 1. 8 医中誌Web Version 4

次に、昨年、2月にバージョンアップされた、医中誌Webの機能と今後の展開について、述べたい。

「医中誌Web (Ver. 4)」では、検索結果から、オンラインジャーナル等へのリンク、あるいは

機関ごとの個別の設定が可能になり、Ver. 3から、新たに一步を踏み出したサービスが実現されている。

(1) オンラインジャーナル等へのリンク

検索結果から、ワンクリックでフルテキストが読める機能というのは、利用者にとって、その利便性は究極の形態と言える。海外に比べ、国内の医学雑誌の電子化は遅れているが、Ver. 4では、現存するサービスについて、極力、医中誌からのリンクを確保することを基本方針に据え、国内オンラインジャーナルへのリンクを実現しつつある。リンク先のサービスに関しては、フリーで公開されている場合と認証が必要な場合とがある。後者の場合、医中誌Webとは別に、機関、あるいは個人の契約が必要となる。以下に医中誌Webにて、実現された一次情報へのリンク先を、紹介する。

- 1) Medical Online: (株)メテオインターゲートが提供する国内医学文献の全文PDF配信サービス。2005年9月現在、収録誌は約400誌あり、うち375誌が医中誌採択雑誌。Medical Onlineの一部の収録雑誌は、発行から一定期間、全文PDFは提供されず、Faxによる配信となるが、医中誌Webでの検索結果によって、示されるアイコンには、それぞれ異なるアイコンが表示される。
- 2) PubMed: PubMed IDにより、文献単位でのリンクが行われる。一部の文献については、PubMedから更に、リンクをたどり、フルテキストを閲覧することができる。今回、リンクの対象とした雑誌は、”List of Journals for MEDLINE” (2005年版)のGeographic Listingにおいて、発行国が「Japan」となっている148誌のほか、日本の学会だが、外国の出版者によって刊行されているもの、過去にMEDLINEに収録されていた雑誌も含む、約380誌となっている。
- 3) CrossRef: DOI (Digital Object Identifier)により、文献単位でリンクが行われる。一部の文献に関しては、フリーで閲覧することができる。
- 4) PierOnline: (株)サンメディアから、提供されている電子ジャーナルホスティングサイトへのリンク。医中誌Webからのリンクだけでなく、PierOnlineから、医中誌Webへのリンクも行われている。

- 5) CiNii: NII(国立情報学研究所)の学術コンテンツポータル、「GeNii」にある、論文情報ポータルサイト、「CiNii」との相互リンクです。CiNiiの一部の文献については、更に、NII-ELS(NII電子図書館)のフルテキストにリンクがはられており、昨年、12月から、行われている。

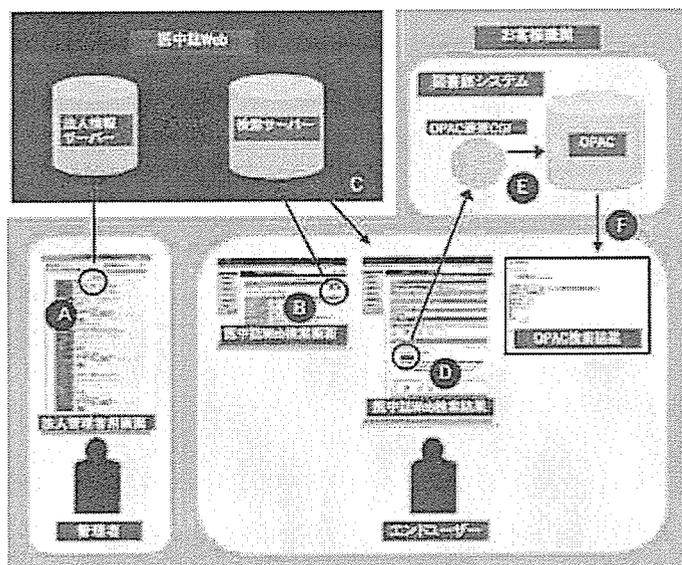
医中誌Webから、上記の各サービスへのリンク件数は、トータルで約50万件(2005年11月現在)。また、リンク情報の更新は月1回、行っている。

今後は、リンク先を拡充するのは勿論のこと、フリーで閲覧可能なタイトル一覧をお知らせする、あるいは、フルテキストリンクありという絞り込み検索を可能にするなどして、実用性を高めたいと考えている。

(2) OPAC (Online Public Access Catalog-蔵書検索システム)連携

医中誌Webの検索結果に、OPACアイコンが表示され、そのアイコンをクリックするとOPAC検索がダイレクトに行われる。

(図2)

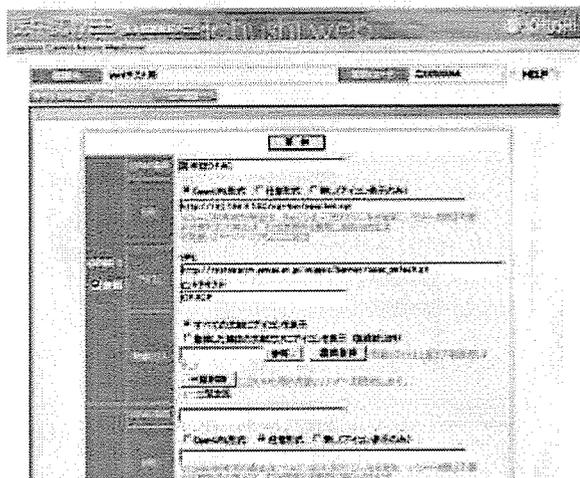


- A: 法人管理者用画面、OPAC連携CGIのURLなどの必要項目を入力し、その内容が法人情報サーバに登録される
- B: エンドユーザー(検索者)が医中誌Web検索を行う
- C: 検索サーバは、検索結果を表示する際に、法人情報サーバを参照し、OPACアイコンを表示する
- D: 検索者がOPACアイコンをクリックする
- E: ISSNなど必要情報がOPAC連携CGIを経由して、OPACに送られ、OPAC検索が行われる
- F: OPAC検索が表示される

医中誌Webから送り出すデータフォーマットは、当初OpenURLのみを予定しているが、OpenURLに対応していないシステムでも連携を可能にするため、ISSNを任意の形式で送り出す方式を追加した。また、図書館で所蔵している雑誌のISSNリストを所定のフォーマットで作成し、医中誌Webサーバに登録することにより、図書館で所蔵している雑誌の文献のみ、OPACアイコンを表示することも可能である⁴。

なお、同様の手順により、リンクリゾルバへの連携も行える。

(図3)



1. 使用チェック: 必ず入れる
2. OPAC名称: 適当な名称を入力
3. URL: 送り出すデータ形式 (OpenURLまたは任意形式) を選択し、前者の場合は、OPAC連携CGIのURL、後者の場合はURLとともに送り出すデータの形式を入力する
4. アイコン: 検索結果に表示されるアイコンのURLを入力(無しでも可)
5. 所蔵リスト: 所蔵している雑誌にだけ、アイコンを表示したい場合、登録する

(3) 所蔵を示すアイコンを検索結果に表示

OPACを導入していないが、所蔵している雑誌の文献に、所蔵を示すアイコンを表示できたら便利との利用者からの超えを実現した。

OPAC連携と同様に、法人管理画面で事前の準備作業を行い、所蔵している雑誌の文献にのみ、アイコンを表示する機能を実現した。所蔵している雑誌のISSNリストの登録が必要である。

(4) 法人管理メニュー

- 1) デフォルト設定：機関ごとに、主な項目について、デフォルト値を設定できるようになった。例えば、検索対象年を最新5年分にするのが適当という場合が多いが、企業のユーザーでは、「全年」を対象とする場合が多い様であり、このような設定項目を利用者ごとに設定できるようにした。
- 2) 外部リンク：当面はOPAC連携の設定のみ行える
- 3) ログ閲覧：アクセスログの閲覧ページをこの画面に包含した。閲覧できる内容は、1時間単位でのログイン数と、最大同時アクセス数、同時アクセスオーバーなど、従来通りのものである。

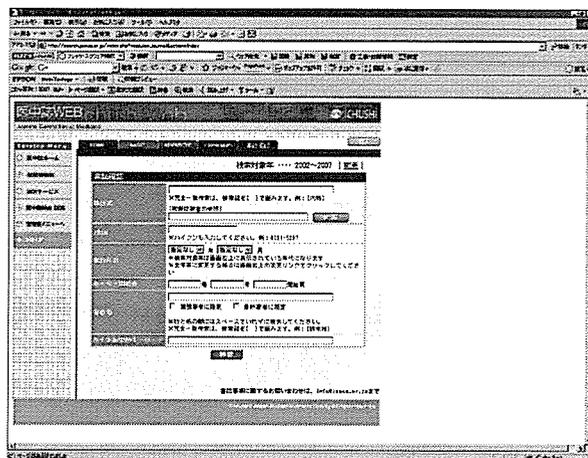
(5) 印刷、ダウンロードなど、出力の流れを改善

出力設定を含め、出力の流れをわかりやすくした。従来は、いったん、印刷用表示に表示内容を切り替えた後に、ブラウザの機能で印刷するというものであったが、イメージアイコンを並べ、検索結果から、印刷したい内容を選択し、別ウィンドウを開き、プリンターのアイコンをクリックすると行えるように改善した。

(6) 書誌確認用画面とWebcart Plusへのリンク

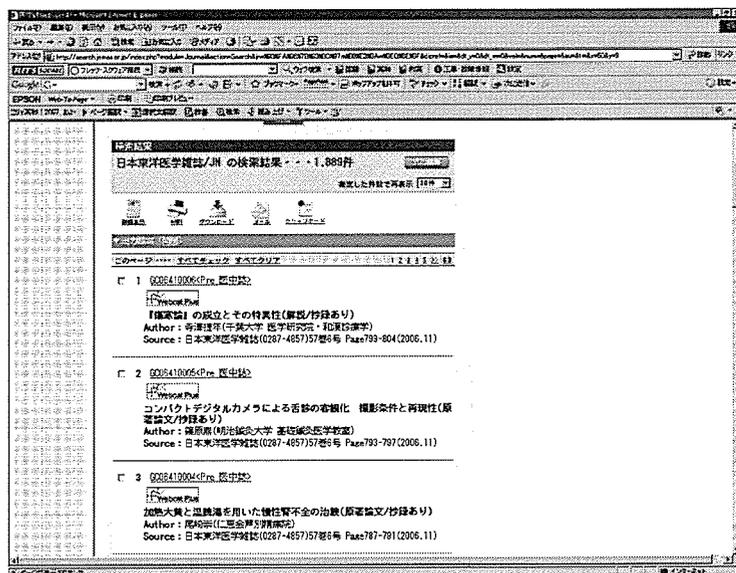
オンラインジャーナルへのリンク、OPAC連携、リンクリゾルバに続き、ILL(相互貸借)支援を年頭においた書誌確認用画面を新設し、Webcart Plusへのリンクを実現した。書誌確認画面は、PubMedのSingle Citation Matcherを手本にし、書誌事項を確認するための検索画面である。必要な項目を一度に入力して、検索することが可能になった。

(図4)



書誌確認用画面での検索結果(タイトル表示)は、BASIC MODE、ADVANCE MODEと同様に画面の下部に表示されるが、ISSNを持っている雑誌の文献の場合には、各文献にWebcart Plusへのリンクアイコンが表示される。Webcart Plusとは、NIIが提供する図書・雑誌の書誌や所蔵館情報の検索サービスで、医中誌の利用者の間でも、相互貸借の際の所蔵確認に広く利用されている。そこで、NIIの許可を得て、医中誌Webの検索結果から、ダイレクトにWebcart Plusにおける該当の雑誌のページにリンクを張るようにした。なお、Webcart Plusのアイコンは、書誌確認用画面では、必ず表示されるが、BASIC MODE、ADVANCE MODEの検索結果には、初期状態では表示されない。表示させたい場合は、法人管理者用画面のデフォルト設定で、「Webcart Plusリンク表示」を「する」に変更する必要がある。

(図5)



3. 1. 9 今後の展開

これまでに実現した、医中誌Webの機能を記したが、今後、クリップボード機能、検索式の出力方法の改善など、今後も、更に利用者が、より良く使えるよう、また、時代に合わせた、ニーズに応えるべく、更な

る改善を予定しており、個人での環境設定も視野に入れている。

この先、API(Application Program Interface)を利用し、データベースとデータベースを、利用者がより、使いやすくなるように、あらたな展開も検討している。

3. 2 医学用語シソーラスの歴史と変遷

3. 2. 1 はじめに

医学中央雑誌刊行会は1903年(明治36年)より、わが国の医学界に貢献すべく、臨床医学に重点を置いた二次情報を作成、提供してきた。創刊当時、抄録誌として発刊され、その内容には、写真や図なども載っており、まさしく雑誌の形態をとっております。時代の変化とともに、その情報量も増え、1983年、効率良く、文献情報にたどり着けるように「医学用語シソーラス」の第1版が作成されました。NLM(National Library of Medicine: 米国国立医学図書館)が毎年発行している、MeSH(Medical Subject Headings)をベースにし、日本独自の疾患名や社会保険制度等の用語を加え、ディスクリプタのコンセプトごとにグループ化され、表記が異なる同義語によっても、文献情報にたどり着けるようになっております。その後、定期的に改訂作業が行われ、2007年1月より、第6版が作成され、索引作業に使用されております。利用者が効率よく、より早く利用できるようにと、1992年、CD-ROM版が作成されました。1996年、社内OA化の整備が整い、コンピュータを使用し、文献情報の作成、編集が行われるようになり、発行形態も抄録誌から索引誌、NLM(National Library of Medicine: 米国国立医学図書館)が発行していた、Index Medicus方式を採用することになりました。その理由は、創刊当時から、網羅性を重視し、文献情報を採択してきたことから、学会抄録集など、会議録と呼ばれるものの情報量

が増え、冊子体という形態では、抄録まで掲載することにより、利用者が利用しにくくなるのではというものでした。冊子体からは抄録がなくなりましたが、CD-ROM版には抄録まで、提供してまいりました。その後、インターネットの普及により、Webでのサービス提供を望む声が高まり、2000年4月、「医中誌Web」が構築されました。医中誌Webも過去、三回のバージョンアップを行い、より早く、より効率良く、利用者が必要としている文献情報の検索を可能にするばかりでなく、2006年2月にリリースされた、Version 4では、一次情報へのリンクを充実させております。何時でも、何処でも、誰でも、必要な時に、必要な情報が手に入れられる環境に合わせ、より良く医学文献情報が手に入れられ、一次情報の提供まで、受けられるように、文献検索を支えてきたのが、「医学用語シソーラス」であります。この「医学用語シソーラス」の歴史と変遷に関して、述べさせていただきます。

3. 2. 2 医学用語シソーラスの歴史

「医学用語シソーラス」は、1983年、第1版が発行され、以来、数年毎に改訂を重ねてきました。第1版から、MeSHを参考とし、第3版以降、カテゴリー構造や登録語については、ほぼMeSHに準拠する形で作成しています。

第1版から第6版に至るまでの変遷は以下の通りです。

(表1)

医学用語シソーラス	発行年	準拠とした MeSH の版	見出し語数
第1版	1983	1978	13,485
第2版	1987	1984	17,882
第2版修正版	1990	1984	17,926
第3版	1994	1991	14,454
第4版	1999	1997	18,156
第5版	2003	2001	21,378
第6版	2007	2005	25,317

(1) 第1版シソーラス

医学中央雑誌索引語である、「件名標目表」用語を収載して、作成されました。カテゴリーは3階層まで採用されており、これは MeSH を参考にして、作成されました。発行形態としては、五十音順で、見出し語(ディスクリプタ)と同義語(非ディスクリプタ)が並列に表記されており、いわゆる、電話帳方式、漢字順に配列されておりました。この頃から、副標目(SubHeadings)とチェックタグ(ヒト、動物、年齢、性別等の区分)を組み合わる索引法が取られておりました。また、参照案内として、関連参照語、MeSH の see also にあたる関連参照語も掲載されておりました。

当時の冊子体は、基礎から臨床、および関連分野までの33科目に分類され、各分類項目にそれぞれ、細分類があるという形態がとられており、それぞれの中で、シソーラス用語が冊子体の件名索引として機能しておりました。

(図1)

第1版シソーラスの表記	
栄養・代謝疾患	C18
栄養障害	C18-1
壊血病	C18-1
代謝疾患	C18-2
類澱粉症	C18-2

(図2)

件名索引の例	
腫瘍-細胞学/免疫学	031771
-/生化学/免疫学	031694
-/免疫学	034168
-/-/薬物療法	036406
腫瘍-多発性原発	035363
腫瘍再発-局所性	032210
腫瘍転移	032394
-/予防・抑制	031694

(2) 第2版シソーラス

第2版になると、カテゴリー構造も第4階層まで拡大され、MeSHのカテゴリーAからGまでの用語が収載されました。この版は一部、欠落や非デ

ィスクリプタからディスクリプタへの案内が修正され、修正版が発行されています。この間にCD-ROM版、医学中央雑誌(医中誌)が作成され、CD-ROM版にはこの修正版が採用されています。

(図3)

第2版シソーラスの表記	
栄養・代謝疾患	C18
栄養障害	C18-1
飢餓	C18-1-1
壊血病	C18-1-2
代謝疾患	C18-2
代謝異常-先天性	C18-2-6
類澱粉症	C18-2-6

(3) 第3版シソーラス

この頃になると、データベース検索の為という要素が一層濃くなりました。CD-ROM版の普及、社内OA化に伴い、データベースの作成、編集作業もコンピュータで行われるようになり、検索側からの要望が作成側に、また作成側から検索側へ、詳細の伝達等がよくなるキッカケとなった頃でもあります。この版においては、ディスクリプタと非ディスクリプタの関係がより、明確化になり、また、全用語にふりがなが付与され、従来の電話帳方式の配列から、ヨミによる、五十音配列へ変更されました。初めて医中誌をCD-ROM等で検索される利用者にも、より使いやすくなりました。また、カテゴリーコードも用語ごとにユニークになり、グループ化が一層、明確になりました。この版では、1991年版、MeSHの用語をカテゴリーAからGまで、2版と同様に採用しており、カテゴリーに関しては、階層構造をMeSHと同レベルにまで、拡張することができました。また、医中誌で採用した独自のキーワード、日本独自の用語(例として、社会保険制度などの用語)をかなり、フリーキーワード(統制語に順ずるもの)とし、より、MeSHに近いものとなりました。

(図 4)

栄養と代謝性疾患	C18
栄養障害	C18-1
飢餓	C18-1-1
欠乏症	C18-1-2
Vitamin Deficiency	C18-1-2-3
Ascorbic Acid Deficiency	C18-1-2-3-1
壊血病	C18-1-2-3-1-1
代謝疾患	C18-2
代謝異常-先天性	C18-2-9
類澱粉症	C18-2-9-12

CD-ROM のサービス開始から、カテゴリー検索は、下位概念の用語も含む、エクスプロード検索に対応できるようになり、より、使い勝手がよくなりました。

社内 OA 化にともない、索引作業の支援機能を充実させることにも、力が入るようになりました。データ作成上も、用語を管理する業務の重要性が重視されるようになり、現在では、専任の用語管理担当者と索引作業者が、新たに発生する用語、多くは索引作業者(インデクサー)からの提案によるものを、その定義、出典等を日々、調査し、採用、不採用を検討しております。

(4) 第4版シソーラス

1997年版、MeSHの全用語、99%に対応しました。検索効率の向上を図るため、見出し語への案内、マッピング機能を充実させることに重点がおかれ、同義語となる非ディスクリプタの充実を図りました。また、編集作業コンピュータ処理の特典を生かし、出現頻度を考慮し、ディスクリプタの変更を行うなど、それまで、担当者の勘と裁量にプラスして、データ分析という要素が加わりました。また、新設語、削除語、変更語のリストも掲載されるようになりました。

(図 5)

栄養と代謝性疾患	C18
栄養障害	C18-5
飢餓	C18-5-5
欠乏症	C18-5-10
Vitamin Deficiency	C18-5-10-15
Ascorbic Acid Deficiency	C18-5-10-15-5
壊血病	C18-5-10-15-5-5
代謝疾患	C18-10
代謝異常-先天性	C18-10-55
アミロイドーシス (旧類澱粉症)	C18-10-55-25

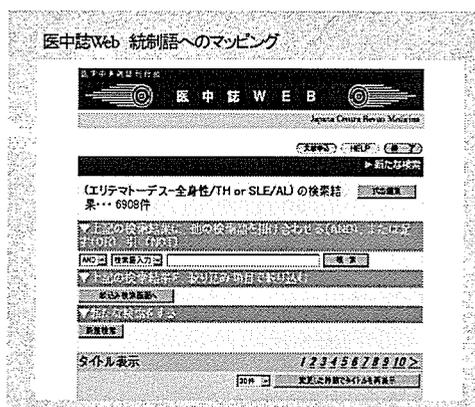
(図 6)

Ketosis, Diabetic	→ 糖尿病性ケトアシドーシス
Tupaiidae	→ ツパイ科
抗エストロゲン剤	→ Estrogen Antagonists
抗原-自己	→ 自己抗原
昼間治療	→ デイクア
胼胝	→ ベんち
類肉腫症	→ サルコイドーシス

(図 7)

1999年	地名、人名をフリーキーワードとして収載
2000年	副標目の整理、統合 100→36標目
2000年	医中誌Webサービス開始 テキストサーチが可能に 同義語辞書活用による統制語へのマッピング

(図 8)



(5) 第5版シソーラス

2003年、コンピュータ処理の特性を社内でも生かせるようになり、2001年版 MeSH に対応した、第5版が作成されました。4版の作成で得たノウハウを発揮し、MeSHに準拠するばかりでなく、国内医学に適合したシソーラスを作成する方針で、改訂作業が行われました。MeSHにある、Pharmacologic Actionを薬効別のカテゴリーとして採用し、日本薬局方に収載されている生薬と漢方薬を収載し、看護、介護関連の用語を充実さ

せ、疾患名以外のディスクリプタは利用者にもわかりやすいように自然語形を採用、また、物質名や細菌名以外は和文の表記を優先し、たとえ、MeSH で採用されている語であっても使用頻度の低いものは、日本の実状に合わせて、整理、統合しました。

(図 9)

栄養疾患と代謝性疾患	C18+
栄養障害	C18-10+
飢餓	C18-10-10
欠乏性疾患	C18-10-20+
ビタミン欠乏症	C18-10-20-30+
アスコルビン酸欠乏症	C18-10-20-30-10+
壊血病	C18-10-20-30-10-10
代謝性疾患	C18-20+
代謝異常-先天性	C18-20-140+
アミロイドーシス (旧類澱粉症)	C18-20-140-30+

(図 10)

Chemical Actions and Uses [D27]
Pharmacologic Actions [D27.835]
Therapeutic Uses [D27.835.854]
Anti-inflammatory Agents, Antirheumatic Agents, and Inflammation Mediators [D27.835.854.194]
Antirheumatic Agents [D27.835.854.194.050]
Anti-inflammatory Agents, Non-Steroidal [D27.835.854.194.050.030]
Antirheumatic Agents, Gold [D27.835.854.194.050.050]
► Gout Suppressants [D27.835.854.194.050.327]
Uricosuric Agents [D27.835.854.194.050.331.900]

(図 11)

化学作用と効用(d27+)
化学作用(d27-10+)
抗炎症剤、抗リウマチ剤、炎症メディエーター(d27-10-110+)
抗リウマチ剤(d27-10-110-110+)
痛風抑制剤(d27-10-110-110-150+)
Allopurinol(d27-10-110-110-150-10)
Celecoxib(d27-10-110-110-150-20)
Indomethacin(d27-10-110-110-150-30)
Naproxen(d27-10-110-110-150-40)
Rofecoxib(d27-10-110-110-150-50)
Zalcitabine(d27-10-110-110-150-60)
尿酸排泄促進剤(d27-10-110-110-150-70+)
Azaprozole(d27-10-110-110-150-70-10)
Benzbromarone(d27-10-110-110-150-70-20)
Dinitrophenols(d27-10-110-110-150-70-30)
Felafenestol(d27-10-110-110-150-70-40)

MeSH では、Supplementary Concept Record という薬物や化学物質を別にもっており、それらの用語はそれぞれが、MeSH のディスクリプタへマッピングされるようになっていきます。医学中央雑誌刊行会では、この方式を生かし、薬物や化学物質のカテゴリを独自に作成し、概念、定義のグループ化をしました。

上記のような、形になっており、このような独

自のカテゴリの構築は、漢方や鍼灸と言った、MeSH にはない、伝統医学関連の用語の扱いにもいかされております。

(図 12)

※ 国内医学分野では頻度が少ないと思われるため
• Ambystoma mexicanum メキシコサンショウウオ (B2:脊椎動物)
• Koro コロ (セベス島のマカッサル人やその他の極東地域の土着民に起こる急性の妄想状態) (F1:行動と行動メカニズム)
• Saturn 土星 (H1:自然科学)
• Jews ユダヤ人 (M1:人間)
• Hospitals, Group Practice グループ診療病院 (N2:保健医療の施設、人的要員、サービス)

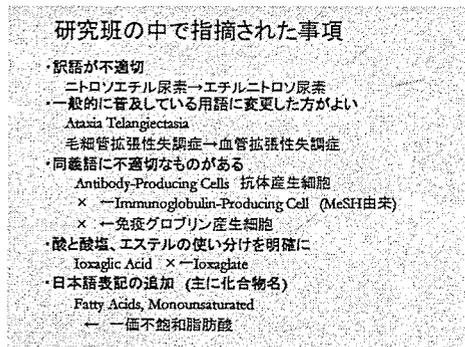
(6) シソーラス改訂作業と過去データの変更処理

これらの変更に伴い、過去、1996 年から作成されたデータを、3 版シソーラスの用語から、4 版シソーラスの用語へ変更する作業も行われました。最終的には担当者ばかりでなく、索引作業にたずさわる社員までも含めてチェック作業が行われ、より、新たなシソーラスの用語での検索がいち早く可能になりました。これが、後々まで引き継がれるようになり、バックメンテナンス作業として位置付けられ、版の改訂ばかりでなく、新たに発生する用語の概念や定義に対応できうる、基礎が誕生しました。

後に、社内 OA 化以前のデータ、CD-ROM で提供されていた 1987 から 1995 年までのデータ、および、1983 年から始まった電算処理により編集されたデータに至るまで、医中誌 Web にて提供できるようになりました。もちろん、一度にではなく、1994、1995 年の 2 年分の処理から始まり、1993 から 1987 年に遡り処理をし、これが第 2 ステップとなり、最終的に、1986 から 1983 年に遡って 4 版シソーラス対応のデータに変換され、現在に至ります。この頃は、私も、毎日、データの処理をあらゆるソフトやスクリプトを作成しては、担当者に見てもらい、また、修正作業をし、というような毎日でありました。

本研究班に協力することになったのは、2001 年からであります。医学中央雑誌シソーラスを用いて、UMLS との対応が、どのようなものかを図る作業が行われた。研究班の中で、以下のような点が指摘された。

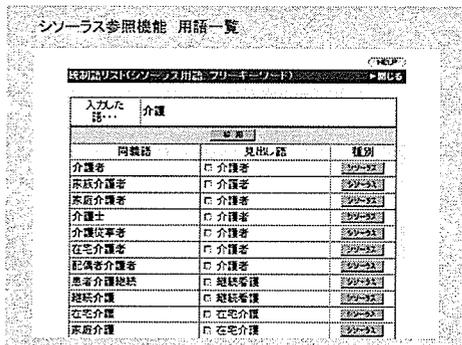
(図 13)



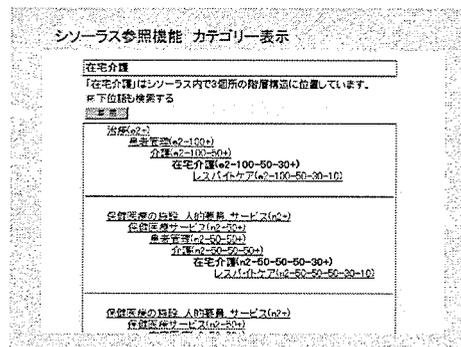
これらの指摘は、第6版シソーラスの改訂に採用されることになった。

また、2003年9月より、医中誌Webにシソーラスの参照機能が追加され、エクスプロード検索も可能になりました。MeSH Browserのようなものを望む声は利用者の中でも多く、これに答えられるようになりました。難を言えば、同義語や定義、インデキシングルールなど MeSH Browser には既にある機能が追加され、シソーラスの閲覧が可能になれば、なお良いのですが、種々の事情により、今のところは、検索支援という域に留まっています。今後は利用者の要望に答えるべく、医中誌Webの改善を続けていく予定です。

(図 14)



(図 15)



(7) 第5版から第6版への改訂作業

この改訂作業のために、「医学用語委員会」(委員長:野添篤毅)を編成し、2004年11月に第1回用語委員会を開き、改訂作業の方針が検討されました。

第5版からの継続検討事項は以下のとおり。

- ① 略語の扱い…医中誌Webにて、ディスクリプタへの案内に活用する
- ② 英和対応…英語、日本語に限らず、シソーラスの中では、表記の違う同義語となっているものを、よりよく活用できるようにしてはどうか。
- ③ 提供媒体…冊子体よりも、機能を充実させWebでの提供を充実させる

略語に関しては、医中誌Web上では、以下のように案内されている。

(図 16)



6版への改訂には、2005年版MeSHへ対応し、発行は2007年1月を予定することが決まりました。5版改定時から、早4年が経過しており、前回の改定では、2001年版のMeSHに対応しているため、その4年間のMeSHの変更内容を6版シソーラスに反映させることが必須事項でありました。

この間の主な改訂内容は、

- ① 動物のカテゴリの改変
- ② 植物名の追加・・・生薬、漢方薬などを使用する治療法に対応
- ③ 生命倫理用語の充実
- ④ 膜輸送蛋白質、酵素など、生体機能蛋白質の用語が充実
- ⑤ 遺伝学関連のカテゴリが新設
- ⑥ 歴史的事件、戦争名が追加

以上が、今回の改訂で対応した事項でありました。このうち、最も作業に時間を要したのは、植物名の対応で、医学中央雑誌シソーラスでは、多くの植物名がフリーキーワードとして、扱われていたため、MeSH で新設された植物名との付け合せが、非常に困難でありました。また、生命倫理の用語も、これらに関する辞書などが少ないことから、訳語の選択に苦勞する場面が多々、ありました。一方、歴史的事件、戦争名の語は、今回、追加しませんでした。例として、”September 11 Terrorist Attack” (アメリカ同時多発テロ)、などは、日本の医学文献の検索には、必要度が低いと判断しました。

新規に追加されたものとして、地名が採用されました。MeSH の Z カテゴリにあたる用語で、世界の国名、日本の都道府県名、政令指定都市名が追加され、疫学的な要素へも対応できるよう配慮されました。

(図 17)

発行年	新設語	変更語	削除語
2002年	847	185	47
2003年	1251	93	20
2004年	666	109	71
2005年	487	129	60
合計	3251	516	198

(図 18)

	A	B	C	D	E	F	G
第5版	1,381	1,713	4,116	8,450	2,117	819	1,843
新設	100	1709	243	1030	179	50	205
	1,481	3,422	4,359	9,480	2,296	869	2,048
H	I	J	K	L	M	N	総用語数
416	421	293	113	335	170	1,049	21,378
40	40	40	62	36	21	60	3,251
456	461	333	175	371	191	1,109	24,629

※ MeSH2005のヒストリー項目の登録年が2002-2005のものをカテゴリ別にディスクリプタ数を集計した。総用語数はカテゴリの重複をふくまないディスクリプタ数なので、カテゴリ別語数の合計とは異なる。

その他には、UMLS(Unified Medical Language System) 対応があります。医学中央雑誌のシソーラス語は、2004年からは、UMLSにMeSHのJapanese Translationとして提供されております。今後、MeSHがどのように進むかにありますが、今までのようなDescriptor CentralからConcept Centralになる場合に対応できるよう、検討しております。実際問題として、MeSHではあるディスクリプタの同義であっても、Conceptという観点から見ると、全く別物となる場合が、多々、存在しております。

(図 19)

Ocular Motility Disorders 眼球運動障害 DUI:D015835
Brown Tendon Sheath Syndrome 腱鞘症候群 C0155339 ICD-9-CM,SNOMED-CT,ReadCodes
Cyclophoria 回転斜位 C0152219 ICD-9-CM,SNOMED-CT,ReadCodes
Opsoclonus 眼球クローヌス CUI:C0242567 SNOMED-CT,ReadCodes
Parinaud's Syndrome パリノー症候群 C0152222 SNOMED-CT,ReadCodes (訳語はステッドマンによる)

UMLS への医学中央雑誌シソーラスの提供は、本研究班の研究内容を NLM にて、館長、Dr. Lindberg、副館長、Ms. Humphreys、MeSH 部門のチーフである、Dr. Nelson に日本の医学会用語集と UMLS の対応がどのようなものであるかを、紹介したことに端を発している。その後、医学中央雑誌刊行会用語委員会委員長である野添先生に Dr. Nelson から、日本語の MeSH を提供できないかと打診があり、コンピュータ上でデータ処理でき得るものをテストデータとして送り、その後、何度かやりとりがあり、実現した次第です。Dr. Nelson の将来の構想に漢字圏の地域、国にも PubMed 検索を容易にするものを提供したいという構想があり、

用語委員長でもある野添先生のお力添えがあって実現したものであります。また、当時、研究班の主任研究者であった脊山先生、現主任研究者の開原先生、コンピュータ及びデータベース構築の面から、多大なアドバイスを頂いた小野木先生に心から、感謝するものであります。

(8) 第6版シソーラス改訂における問題点

一部を紹介します。

1) “Colorectal Neoplasms” と大腸腫瘍

第5版シソーラスを作成する際、MeSHの“Colorectal Neoplasms”を「大腸腫瘍」として登録しました。日本の文献では「直腸結腸腫瘍（癌）」ではなく「大腸腫瘍（癌）」と表現されることが圧倒的に多いという実状を重く見てこのように登録したのですが、その結果、カテゴリー上、「大腸腫瘍」の下位に位置付けられるべき「盲腸腫瘍」が「大腸腫瘍」と並列になってしまう、という問題が生じていました。この問題を解決するために「大腸腫瘍」ではなく「直腸結腸腫瘍」を採用すべきなのか？との検討を重ねる中で、「大腸がん取扱い規約」で盲腸に発生した癌も大腸癌に含めていることから、第5版と同じく「大腸腫瘍」を採用し、「盲腸腫瘍」を「大腸腫瘍」の下位に位置付けることとしました。

これは、MeSHと異なる例です。

2) 疫学用語とカテゴリーの見直し

シソーラス第5版では、疫学分野のMeSH用語“Clinical Controlled Trial”を、そのまま「比較臨床試験」としていましたが、実際のインデクシングにおいては「準ランダム化比較試験」に対してこの「比較臨床試験」を索引している、という実態がありました。そこで、シソーラス第6版では、この実態に合わせて、“Clinical Controlled Trial”は「準ランダム化比較試験」とすることとしました。また「準ランダム化比較試験」「ランダム化比較試験」のカテゴリー上の位置関係は、上下ではなく並列なので、そのように変更しました。なお、このシソーラス語の変更に伴い、2007年から、研究デザインタグ「比較臨床試験」も「準ランダム化比較試験」に変更されました。さらに、専門の先生方のアドバイスで、「前向き研究」、「後向き研究」、「多施設共同研究」カテゴリーについて検討し、MeSHとは、多少異なるカテゴリーを構築しました。

3) 副標目

2001年より使用してきた36個の副標目について、見直しを行いました。その結果、「異常」「悪性」を廃止すること、及び、物質の欠乏や減少に対して、1983から1995年まで、使用していた「欠損・欠乏症」を「欠損・欠乏」と表記を改めて復活させます。この変更に伴い、1983から1995年に使われた「欠損症・欠乏症」、1996から2000年に使われた「欠乏症」をすべて「欠損・欠乏」に置換する予定です。さらに、物質の欠乏や減少を表す副標目が無かった2001から2006年については、順次メンテナンスを行い、必要な文献に「欠損・欠乏」を付与し、最終的には、全年度のデータにおいて、「欠損・欠乏」による絞り込み検索が行えるようにしたいと考えています。

4) チェックタグ

「植物」「鳥類」「in vitro」を廃止。また、「妊婦」を「妊娠」に表記変更し、ヒトだけでなく、動物にも使用できるようにした。

3. 2. 3 結び

初版から、つい先ごろ、改定された、第6版シソーラスまでの変遷を述べさせて頂きました。研究班でお世話になった先生方のお力添えもあり、何とか、ここまで来ることができました。この研究班で、検討して来たことは、他の分野でも、役に立っております。UNLSへのデータ提供だけに留まらず、WHO西太平洋地区における、Traditional Medicine の中国、韓国、日本の伝統医学用MeSHの作成などにも、携われるようになりました。中でも、その最たるものは、日本医学会が発行する、医学用語辞典英和版の改訂作業に携わらせて頂けるようになりました。同義語の選択、Conceptに従ってグリーン化するなど、これらの作業を私どもの医中誌Webを使って頂いている側の先生方から、意見を伺えたことは今後、非常に参考になることばかりでありました。

中国中医科学院のFan先生が仰っていた、「エキスパートの先生方と情報を伝える側とのコラボレーションなくしては、いい文献情報をつくることはできない」という言葉の意味がようやく、わかりはじめたところでもあります。

当会の専務理事でありました故宮野昌明が生前、「インターネットの急激な普及は、何時でも、何処でも、誰でも、必要な情報を直ちに入手できる環境となった。一方においては、文部科学省が

進めている「ライフサイエンス統合データベース」整備に見られるように、現在、各所に散在しており、有効活用されているとは言い難い。多種多様なデータベースを統合し、最新の研究をサポートするには医学中央雑誌刊行会もEBM、診療ガイドラインの紹介等に限らず、引き続き充実をはかり、医療関係者ならびに患者、一般国民が求めている情報を素早く伝えていかなければならない。その際、用語は重要なものになる」と常々、申しておりました。米国だけに限らず、あらゆるBiomedicalの分野で、データベースの橋渡しとなるべく、より一層、医学用語シソーラスの作成に取り組んでまいります。

3. 3 日本医学会の医学用語に関する活動

3. 3. 1 はじめに

日本医学会は、現在101の専門的な医学学術団体から構成される組織で、多くの活動を行っているが、その一つに医学用語に関する活動がある。

その活動は、日本医学会が医学用語管理委員会を組織して行っている辞典の編纂と、各分科会が行っている専門領域での医学用語集の編纂がある。学会が用語に関する活動を重視してきたのは、医学用語は診療・医学教育・医学研究の根幹を成す言語であるからである。

歴史的には江戸末期のオランダ語の翻訳に始まり、明治になってからはドイツ語、さらには英語を日本語に置き換えるということから築かれてきた。また医者仲間で通用する専門用語であるという性格から、医学用語は一般の人に通じる言葉というよりも、むしろ現在では26万人に達した医師相互のコミュニケーションの道具として100年以上にわたって培われてきたものである。しかも日本医学会は現在101の分科会から構成され、その67の分科会が独自の用語集を持っているが、これらの多くは分野内で使われてきた用語を集めたものである。

その用語集の間で統一をはかるという試みは日本医学会医学用語管理委員会の「日本医学会医学用語辞典英和」(第2版)⁽¹⁾から始まったが、各分科会の調整が本格的に行われたのは、次に述べる第3版⁽²⁾からである。

最近では、医学用語は、それぞれの専門領域を超えて使われるようになってきている。英語の教科書を翻訳するというような教育の場でも、学会誌の原稿執筆という研究の場でも、また診療の場でも、色々な用語が使われたのでは多くの不都合が起こる。

更には一般社会でも一部の医学用語が広く使われるようになってきているから、医学用語を統一したという声が強くなってきたのも当然のことであろう。

ここでは、こうした活動を述べるが、日本医学会の活動は、各分科会の活動のいわば集大成であるので、ここではまず、分科会における活動から述べ、その後、日本医学会医学用語管理委員会の活動を述べることにしたい。

3. 3. 2 日本医学会分科会における用語管理

(1) 日本医学会の分科会における用語辞典の状況

日本医学会は101の分科会から構成されているが、各分科会には用語委員会を持っていて、それぞれの分野に特有な専門用語をはじめ関連用語の管理に関する活動をしている。平成17年の段階で68の分科会が独自の用語集の刊行を行っている(表1)。日本寄生虫学会、日本外科学会や日本産婦人科学会、日本公衆衛生学会、日本化学療法学会、日本小児外科学会、日本人工臓器学会、のように複数の用語集を出版している学会もある。また、1982年に出版されて以来改訂されていない用語集もある。

(2) 分科会の用語集作成の一例:「生化学用語辞典 英和・和英」編集の軌跡

英文教科書の翻訳が盛んになるにつれて和訳用語の統一が叫ばれるようになってきたが、その一例として日本生化学会が行ってきた用語管理への取り組みを紹介したい。

日本生化学会には10,549人(2006.11.17現在)の会員を抱え、その約20%が医学系の会員からなっている。学会として月刊の英文誌「*Journal of Biochemistry*」、と和文誌「生化学」を刊行していて、用語委員会では生体内にある物質、酵素から遺伝子はもとより生命現象に関わる様々な用語に関して英語と日本語の両面から対応付けをするという編集作業が行われてきた。和文誌には総説とミニレビューが掲載されているが、英語は同じ用語でありながら、日本語で訳す際に著者によってローマ字、漢字、カタカナ、ひらがな、等が混在しており、一つの論文の中に二通りの表現が存在するというような極端な例もあって、読者はもとより編集に当たる者にとっても頭の痛い問題であった。1980年代に学会として英文和訳の標準用語集の制定が望まれたのはこのような事情を背景にしたものである。

日本生化学会が「生化学用語辞典 英和・和英」⁽³⁾を刊行したのは1987年であるから、今年で丁度20年経ったことになる。規模としては英和・和英とも各約14,700語が収録されている。この

辞典は単なる英文和訳だけではなく、重要語には簡単な解説が付いている。現在は2001年に新しい用語を収録し、使われなくなった用語を削除するという改定を行った「生化学用語辞典 英和・和英」(第2版)⁽⁴⁾が刊行されている。

この「生化学用語辞典 英和・和英」が出版される伏線となったのは「生化学辞典」で1984年に初版⁽⁵⁾が刊行されている。これは日本生化学会編ではなく、東京大学医学部生化学教室の山川民夫・今堀和友両教授が退官される際の記念事業の一環として作られたもので、生化学、分子生物学、細胞生物学の用語20,100項目を収録している。見出し語は日本語で、解説も日本語であるが、見出し語に対応する英語が記されているので、この英語と日本語の組み合わせが「生化学用語辞典 英和・和英」⁽³⁾の原型となった。「生化学用語辞典 英和・和英」⁽³⁾はこの「生化学辞典」⁽⁵⁾の副産物として誕生したといっても過言ではない。

「生化学辞典」⁽⁵⁾の見出し語の選定に当たっては、当時出版されていた英語で書かれた生化学の教科書が用いられ、その巻末にある索引から英語をピックアップする作業が行われた。1980年代になって英語の教科書を原著で読んで勉強する時代から翻訳された日本語の教科書を読む時代へと移り変わりつつあって、当時既に数種類の英語の教科書が日本語に翻訳されていた。ところが、酵素の名前や代謝経路の名称の翻訳に際して、訳者によって異なった日本語があてられていたので、訳語の標準化が望まれるようになった。

「生化学辞典」⁽⁵⁾は500名を越える各分野の専門家による分担執筆で行われたので、解説の内容については執筆者に委ねられたが、用語の表記に関しては9名の編集委員と2名の監修者による徹底した議論の上に統一をはかっていった。

「hexokinase」を「ヘキソキナーゼ」とするか「ヘキソカイネース」とするかとか、「tyrosine」は「チロシン」なのか「タイロシン」なのかとか、「dehydrogenase」は「脱水素酵素」とするか「デヒドロゲナーゼ」が良いのかなど、今から25年前に検討したことテーマがその後、様々な用語委員会で繰り返し議論されてきたので、用語の統一は未だに正解の得られない永遠の課題のように思われる。

この検討の過程で生化学会として採用したもので、20年経った今でも医学用語の世界で議論が分かれている例として、「protein」と「fiber」の

訳語を挙げるができる。

生化学で頻繁に使われる「protein」は「蛋白質」、「たん白質」、「たんぱく質」、「タンパク質」という4種類の表記が世の中には存在する。これはいずれも英語の「protein」が訳されたものではなく、ドイツ語の「Eiweiss」の訳として卵を意味する漢字の「蛋」と白身の「白質」を組み合わせたものである。ところが「蛋」という文字が常用漢字表にないことから平仮名、片仮名を用いてはどうかということになり、上記の書き方が用いられてきたという経緯がある。「日本医学会医学用語辞典英和」(第2版)⁽¹⁾では「蛋白(たんぱく)質」と書かれているが、2003年の「学術用語集・医学編」⁽⁶⁾では「タンパク質」となっている。「生化学用語辞典 英和・和英」では1987年の初版⁽³⁾以来「タンパク質」を用いているが、最近の生化学関連の書物では英語の訳語としてこれを「プロテイン」と片仮名で書くことも多くなってきた。因みに今回改訂される「日本医学会医学用語辞典英和」(第3版)⁽²⁾では「タンパク質」が用いられることになった。

もう一つの例が「fiber」で、一般の英和辞典をひけば「繊維」と訳されているのは、この言葉が織物の範疇に入るからである。ところが医学用語では「線維」であって、「nerve fiber」は「神経線維」と表記する。「fibroblast」を「繊維芽細胞」と書くか「線維芽細胞」と書くかによってその原稿を書いた人の経歴がわかるほど色分けがはっきりしている。「日本医学会医学用語辞典英和」(第2版)⁽¹⁾はもとより、「学術用語集・医学編」⁽⁶⁾でも「神経線維」が採用されている。そこで一般用語もこの言葉に統一してはどうかという提案が繰り返し行われてきたが、未だに決着を見ていないのは、言葉が理論だけではなく人口に膾炙してはじめて定着するからである。「生化学用語辞典 英和・和英」⁽³⁾で「神経繊維」を用いているのはこの間の事情を勘案したためであり、一般用語の方を採用した。繊毛と線毛も同じ関係にあり、前者が一般用語、後者が医学用語として使われている。

(3) 医学会分科会の用語統一

日本生化学会では「生化学用語辞典 英和・和英」(第2版)⁽⁴⁾が刊行されてからは用語の問題は情報専門委員会が引き継いでいる。ホームページの企画運用が主要課題になったからである。

101の分科会でも用語委員会という名称が用いられているかどうかは別として、何らかの委員会が対応しているものと思われる。

問題は、分科会相互間で用語の調整が行われていないことで、例えば日本生化学会と日本薬理学会、日本生理学会の3者間での検討会が行われたことはなかった。勿論、それぞれが用語に関する委員会を開く折に既刊の関連学会の用語集を参考に見ることはあっても、食い違いに関して委員同士が集って協議するような機会はこれまでなかった。

「日本医学会医学用語辞典英和」(第3版)⁽²⁾の編集に当たっては、各分科会の用語担当者を一堂に集め、問題点の提議を求めた上で、その後はメールを用いて協議するというスタイルで相互間の調整を図ったが、WEBの普及のおかげで用語統一の道が開かれたと言えよう。

勿論、各分科会で異なった用語を制定している実態が明らかになったからといって、直ちに統一されるわけではなく、まだ長い道のりがあることには変わりがないが、問題点の洗い出しと、協議が時々刻々行えるようになったことは画期的なことで、10年後に「日本医学会医学用語辞典英和」(第4版)が出されるときには解決してほし

いと願っている。

分科会相互間の用語の調整に触れてきたが、もうひとつ大きな問題が社会で用いられる一般用語との整合性で、今回の「日本医学会医学用語辞典英和」(第3版)⁽²⁾の編集に当たっても配慮した点であるが、これもWEBを通じて解決できる日が近いと信じている。

文献

- (1) 日本医学会医学用語辞典英和(第2版)：日本医学会医学用語委員会編、南山堂(2001)
- (2) 日本医学会医学用語辞典英和(第3版)：日本医学会医学用語委員会編、南山堂(2007)
- (3) 生化学用語辞典英和・和英(第1版)：日本生化学会編、東京化学同人(1987)
- (4) 生化学用語辞典英和・和英(第2版)：日本生化学会編、東京化学同人(2001)
- (5) 生化学辞典(第1版)：今堀和友・山川民夫監修、東京化学同人(1984)
- (6) 学術用語集医学編：文部科学省・日本医学会、丸善(2003)

	分科会	医学用語に関する印刷物
1	日本医史学会	なし
2	日本解剖学会	『解剖学用語(Nomina Anatomica Japonica)第12版』(1987.9.30)
3	日本生理学会	『生理学用語集改訂第5版』(1998.8.20)
4	日本生化学会	『英和・和英 生化学用語辞典』(2001.10.24 第2版)
5	日本薬理学会	『薬理学用語集』(1993.4.1)
6	日本病理学会	なし
7	日本癌学会	なし
8	日本血液学会	なし
9	日本細菌学会	『英和・和英 微生物学用語集第5版』(1997)刊行予定
10	日本寄生虫学会	『寄生虫学用語集英和・和英対訳篇』(1991.10)
		『寄生虫和名表』(1994.12)
11	日本法医学会	「法医学用語(案)」(1982.3)
12	日本衛生学会	『衛生・公衆衛生関係用語集』日本衛生学会編(1976)
13	日本民族衛生学会	『衛生・公衆衛生関係用語集』日本衛生学会編(1976)
14	日本栄養・食糧学会	『英和・和英栄養・食糧学用語集』(1997.5.15)
15	日本温泉気候物理医学会	『温泉気候物理医学用語集』(1996)
16	日本内分泌学会	
17	日本内科学会	『内科学用語集第5版』(1998.3.1)
18	日本小児科学会	『小児科用語集』(1994)
19	日本感染症学会	なし

20	日本結核病学会	『結核用語事典』(1992.4.15)
21	日本消化器病学会	『消化器病学用語集』(1996)
22	日本循環器学会	『循環器学用語集』(1995.3.1)
23	日本精神神経学会	『精神神経学用語集』(1989.3.20)
24	日本外科学会	『手術用語集(改訂第2版)』(1990.5)
		『外科略語集』(1990.5)
		『外科的疾患用語集改訂第3版』(1997.4)
25	日本整形外科学会	『整形外科学用語集(第5版)』(1999.4.15)
26	日本産科婦人科学会	『産科婦人科用語集(第4版1刷)』(1995.8.30)
		『産科婦人科用語解説集第2版』(1997.3.20)
27	日本眼科学会	『眼科用語集(第4版)』(1999.4.15)
28	日本耳鼻咽喉科学会	『耳鼻咽喉科学用語解説集(改訂第2版)』(1993.5.25)
29	日本皮膚科学会	『皮膚科用語集和英・英和』(1997.3.25)
30	日本泌尿器科学会	『泌尿器科用語集』(1996.3.25)
31	日本口腔科学会	なし
32	日本医学放射線学会	『放射線用語集』(2000年7月新版出版予定)
33	日本保険医学会	『保険医学用語集第2版』(1992.3.31)
34	日本医科器械学会	なし
35	日本ハンセン病学会	あり
36	日本公衆衛生学会	『衛生・公衆衛生関係用語集』(1976.7.10)
		『衛生・公衆衛生学用語集』(1999.10.26)
37	日本衛生動物学会	『衛生動物学用語集』(1988.5.1)
38	日本交通医学会	なし
39	日本体力医学会	なし
40	日本産業衛生学会	『衛生・公衆衛生関係用語集』(1976.7.10)
41	日本気管食道科学会	H12年3月現在作製中
42	日本アレルギー学会	『アレルギー学用語集』(1995.6.30)
43	日本化学療法学会	『英和和英化学療法用語集』(1999.3)
		『英和和英癌化学療法用語集』(2001.5.25)
		『改訂化学療法用語集』(2005.7.10)
44	日本ウイルス学会	『ウイルス学用語集』(2000刊行)
45	日本麻酔学会	『麻酔科学用語集(第3版)』(2002.4.20)
46	日本胸部外科学会	『胸部外科学用語集』(1993.10.13)
47	日本脳神経外科学会	『脳神経外科用語集』(第2刷1998.4.10)
	分科会	医学用語に関する印刷物
48	日本輸血学会	『常用輸血医学用語集』(1995年度刊行)
49	日本医真菌学会	『医真菌学用語集第2版』(1999.3.10)
50	日本農村医学会	『農村医学用語集改訂第2版』(1999.3.31)
51	日本糖尿病学会	『糖尿病学用語集』(2001.3.27)文光堂
52	日本矯正医学会	なし
53	日本神経学会	『神経学用語集』(1993.6改訂第2版)
54	日本老年医学会	『老年医学用語集』(2001年度版)
55	日本人類遺伝学会	『人類遺伝学用語集』(1988.2)
56	日本リハビリテーション医学会	『リハビリテーション医学用語集1997年度版』(1998.2)

57	日本呼吸器学会	『胸部疾患学用語集第3版』(1996.11.20)
58	日本腎臓学会	『腎臓学用語集』(1988.10.10)
59	日本リウマチ学会	『リウマチ学用語集(改訂第2版増補)』(2000.6.1)
60	日本エム・イー学会	『ME用語辞典』(1999年刊行)
61	日本先天異常学会	『先天異常用語集』(1991.3.20)
62	日本肝臓学会	なし
63	日本形成外科学会	『形成外科用語集第3版』(1998.12)
64	日本熱帯医学会	なし
65	日本小児外科学会	『小児外科疾患用語集』(1994.6.1) 『小児外科手術用語集』(1988.5.20)
66	日本脈管学会	なし
67	日本周産期・新生児医学会	なし
68	日本人工臓器学会	『人工臓器用語集』(1987.11.4) 『人工臓器用語解説集』(1991.9.30)
69	日本免疫学会	『免疫学用語辞典』(1989.3.10第2版)
70	日本消化器外科学会	なし
71	日本臨床検査医学会	『臨床検査項目分類コード第10回改訂第1版』(1997.10.29)
72	日本核医学会	『核医学用語集』(日本アイトソープ協会)(1987.3.31)
73	日本不妊学会	なし
74	日本救急医学会	『救急学用語集』(1989.5)
75	日本心身医学会	『心身医学用語事典』(1999.6.1)
76	日本病院管理学会	『医療・病院管理用語事典』(改訂版:2001.7.3)
77	日本消化器内視鏡学会	『消化器内視鏡用語集第2版』(1997.4.15)
78	日本癌治療学会	「癌の臨床に関する用語(案)」(CANCERTHERAPY別刷1987)
79	日本移植学会	『日本移植学会用語集』(刊行未定)
80	日本職業・災害医学会	なし
81	日本心臓血管外科学会	なし
82	日本リンパ網内系学会	なし
83	日本自律神経学会	『自律神経学用語集』(2001.5.24)文光堂
84	日本大腸肛門病学会	『大腸疾患用語集』(1996.10.25)
85	日本超音波医学会	『超音波診断第2版』(1994.7.15)『医用超音波用語集』
86	日本動脈硬化学会	なし
87	日本東洋医学会	『東洋医学用語集』(1999年度版)
88	日本小児神経学会	『小児神経学用語集』(1996)
89	日本呼吸器外科学会	なし
90	日本医学教育学会	なし
91	日本医療情報学会	
92	日本疫学会	『疫学辞典第3版』(2000.1.30)
93	日本集中治療医学会	『集中治療用語集』(1992.6.25)
94	日本平滑筋学会	なし
95	日本臨床薬理学会	
96	日本神経病理学会	
97	日本脳卒中学会	
98	日本高血圧学会	

3. 3. 3. 日本医学会医学用語管理委員会の活動

(1) 日本医学会・医学用語辞典（英和）第3版¹

日本医学会医学用語辞典は、医学・医療関係者が教育、研究、診療、医療行政などの場において、論文や教科書の執筆、診療記録の記載、行政文書の作成などに際し必要な辞典として長年にわたって利用されてきた。

医学用語辞典の歴史をたどってみると、医学用語の問題が医学界でとりあげられたのは、大変古く1940年の第11回日本医学界総会の時であった。この時長与又郎会頭の提唱によって医学用語整理委員会が発足し、1943年1月に第一次医学用語集の一部がまとまり印刷公表されたが、第二次世界大戦のためにこの仕事は継続不可能となり中絶された。

1952年に田宮猛雄日本医学会長の許に、日本医学会医学用語委員会が新しく組織された。この委員会は一時中断する時期もあったが、医学用語の整理を続け、1991年4月、草間悟委員長時代に「医学用語辞典 英和」の初版が完成し出版された。この医学用語辞典は、その後改訂され、1991年、第2版の英和辞典が刊行され、さらに1994年に和英辞典が出版された。

この第3版は、2005年以来一部のメンバーの交代した医学用語委員会²によって第二版の改訂の努力が続けられてきたもので、2007年4月の日本医学会総会を契機に刊行された。

なお、日本医学会・医学用語管理委員会は、この辞典の他にも「文部科学省・日本医学会共編の学術用語集医学編（2003年刊）」を刊行している。

(2) 日本医学会・医学用語辞典の意義

ここで、日本医学会・医学用語辞典の意義と特徴を改めて考えてみたい。

医学用語辞典は、日本医学会の編纂しているものの他にも多くの辞典または事典が存在している。それにもかかわらず、日本医学会が敢えてこの辞典を編纂する意味はどこにあるのであろうか？

医学辞典にも多くの種類がある。医学用語の詳しい解説を記した事典に近い形態のものもあり、また、翻訳に用いることを目的として、多くの用例などを記した英和辞典もある。

こうした辞典の中にあつて、日本医学会医学用語辞典（英和）は、形式的に見れば、単に英語の医学用語に対して対応する日本語を記しただけの単純なものである。しかし、日本医学会医学用語辞典は、他の医学辞典にはない特徴をもっている。

その特徴とは、本辞典が、医学界のみならず、一般社会で使われる医学用語に対して、標準的な用語を示している点である。標準的な用語は、収載されている英語に対しても、またそれに対応する日本語に対しても存在している。すなわち、ここに収載されている英語であれば、英語圏で現在広く使われている英語であり、またその日本語も日本国内で標準的な用語として使われることを示している。

それが可能となるのは、日本医学会には、多くの分科会が存在し、それぞれの学会が専門的な知識をこの辞典に提供できるからである。

(3) 本辞典編纂の編集方針

ここでの第3版の基本的な編集方針を記す。その最も重要な方針は、日本の医学用語の表記方法を標準化したいということである。この中に出てくる重要な付表などは、日本医学会のWEB上に搭載されていて、今後継続的に改訂される予定であるので、下記のWEBサイトもぜひ参照していただきたい。

<http://www.med.or.jp/jams/>

¹ 本原稿は、日本医師会雑誌 2007年4月号に掲載された原稿を基礎に本報告書用に書き換えたものである。

² 現在の医学用語管理委員会委員は次の人たちである。開原成允（委員長：国際医療福祉大学大学院長）、杉本恒明（副委員長：関東中央病院名誉院長）、大江和彦（東京大学大学院教授）、小野木雄三（東京大学大学院助教授）、河原和夫（東京医科歯科大学大学院教授）、坂井建雄（順天堂大学大学院教授）、清水英佑（東京慈恵会医科大学教授）、篠原恒樹（医学中央雑誌刊行会理事長）、脊山洋右（大学評価・学位授与機構客員教授）、野添篤毅（愛知淑徳大学大学院教授）、山口俊晴（癌研究会有明病院消化器外科部長）、山口直人（東京女子医科大学教授）

1) 収集された用語

本辞典で収載された用語は、「日本医学会医学用語管理委員会編 医学用語辞典英和 第2版」に収載されている用語を基礎に、米国国立医学図書館が編纂する **Medical Subject Headings (MeSH)**

(2006年版) 及び **Unified Medical Language System (UMLS)**、日本医学会分科会より推薦された用語を参考にして選定したものである。

MeSH と **UMLS** を参考にしたのは次の理由による。英和辞典では、何を英語の見出し語として採用すべきかは重要な問題である。しかし、これまでの辞典ではその基準はなく、歴史的に集積された英語見出し語が並んでいるだけの感もあった。例えば、**leukocyte** という用語も、**leucocyte** という用語も、第2版の辞典では同列に採択されている。両方のスペルが存在することは確かであるので、そのこと自体は誤りではないが、辞典を使う側からすれば、どちらのスペルがより標準的であるかが知りたいであろう。このような情報こ

そがこの辞典には求められている。

また、過去の医学では、形態などを記述することが非常に重要であったと思われる。それを反映して、第2版の医学辞典には、非常に多くの記述的な用語が収載されている。例えば、「顔貌」を含む用語は表1のように18語あるが、次に述べるように、**MeSH**に採択されている英語はなく、**UMLS**に収載されている語は、*をつけた5つである。このような用語は現在の医学・医療からみて本当に必要か否かを一度検討してみる必要があった。

しかし、標準的な英語見出し語を選定することは、日本語圏で生活するわれわれでは判断が難しい。このため、米国国立医学図書館 (**National Library of Medicine**) の編纂している **Medical Subject Headings (MeSH)** を参考にしたのである。

表1 現在の辞典に収載されている「顔貌」を含む用語

UMLS 収載	英語	日本語
	abdominal face	腹膜炎顔貌
	adenoid face	アデノイド顔貌
	bird-like face	鳥様顔貌
	bovine face	牛顔貌
	elfin face	妖精顔貌
	frog face	蛙顔貌
	hippocratic face	ヒポクラテス顔貌
	hippopotamus face	河馬顔貌
*	leontiasis	獅子顔貌
*	masked face	仮面状顔貌
*	brachygnathia	短顎症、鳥顔貌
*	moon face	満月状顔貌
	myopathic face	筋障害性顔貌
	paralytic face	麻痺顔貌
	Potter face	ポッター顔貌
	senile face	老人様顔貌
	sphinx face	スフィンクス顔貌
	tetanic face	破傷風顔貌
*	whistle face syndrome	口笛顔貌症候群